常葉大学造形学部
紀要　第15号・2017
長橋秀樹
NAGAHASHI Hideki
2016年11月15日 受理

樂土の森アートセッション2016

Rakudo no Mori Art Session 2016

キーワード：
ボーダー・ボーダレス
場づくり
貼る
トリミング

この活動はボーダー・ボーダレスのテーマの基に“樂土舎”という、「土から生まれ、土と共に戯れ、いずれ土へ還る場」へ美術によって関わるプロジェクトである。メンバーは著者を含めた3名で主な素材はアルミ箔とし、現場の敷地境である60 mの壁面に貼り込む。さらにその壁面をスリット状の壁面からトリミングされた状態で認識させるという入れ子状に壁の存在を覚醒させる仕組みが施されている。

はじめに

会場となる“樂土舎”は、1996年、「土から生まれ、土と共に戯れ、いずれ土へ還る場」という理念を背景に代表のマツダ・イチロウ氏によって、静岡県袋井の土地において始動する。マツダ氏は始動後、この場に関わる“ものづくり”は「モノの根源を考えながら作る作業」と説く。そして、ここに訪れ、関わる者を、それぞれの立場やそれぞれの関わり方で接近することを前提に受け入れている。

マツダ氏はさらに説く、「作業ごとに、人の組み合わせも時間もやり方も様々で固定していない。その時々のめぐり合わせの偶然から生まれるものや事象を皆で受け入れ、舞台を作れば、今度はそこで演ずる人を呼び寄せる。それは演者と観客の一期一会の場づくり作業となり、過程そのものが作品になる。この場所に興味を持った人々のその時々の集まり。その中に濃密なつながりも、ゆるやかなつながりも生まれる。自由で多様性があるからこそものづくりを楽しむ場所として成長している。」

著者は、このようなマツダ氏と3年前（2013年）に知人の作家（奈木和彦氏）を介して出会い、ものづくりの一員としてこのプロジェクトに参加することになった。

実は《樂土の森アートセッション》は今回2度目の開催を迎えており、著者も2度目の参加となる。第1回は、単独での参加だったが、今回は東京藝術大学時代の後輩である山本浩二（工芸科修了）と渡辺五大（彫刻科修了）の3名のユニットで“壁プロジェクト”と銘打ち。今回の活動に取り組む。

『創設20周年・樂土の森アートセッション2016』において代表のマツダ氏から掲げられたテーマは“BORDER｜BORDERLESS”であった。我々ユニットメンバーは2015年8月4日から十数回の現場打ち合わせを重ね、個々の視点でこの場（樂土の森）に起こっている、あるいは起きてきた事象を想起しながら、ユニットにとっての一つのビジョンを形作る。そして、ユニットから以下のようなコメントを宣言する。

『樂土の森アートセッション2015の共通テーマ「ボーダー（境界線）・ボーダーレス」を受けて、我々ユニットは樂土の森と隣接する敷地を分かつ“壁”を表現の支持体として注目した。その“壁”は本来、敷地所有者相方の法的権利を明確に計る基準である。しかし、二十年の歳月の中で“壁”は事情の中から発生したにも関わらず、知らぬ間に独自の“質”を帯び始めていた。この得体の知れぬ“質”へ我々ユニットは新たな“感覚”を付与しようとしている。これから一年の時の中で“質”と“感覚”の融合と対立が展開する。誰も視ていない“風景”の発生に向かって。』

コメント中の新たな“感覚”を付与しようという部分は今回具体的に作品に関わる施行内容を意味している。その方策は、敷地境のコンクリート壁面（約60 m）を洗浄しながら、その壁面にアルミ箔を貼りこむ。

さらにコンクリート壁面の一部がトリミングされて認識できるよう、隣接している建物「風の家」内にスリット状の壁面を設置する。

作品タイトル：「The　blade　to　devide」
素材：アルミ箔、珪藻土、顔料（ランプブラック）、墨、合板

本展覧会フライヤー

全作業のプロセス

①薪小屋における活動

全ての作業はここから始まった。敷地内に点在する、建造物のひとつであるこの薪小屋内の薪を全て移動させ、薪小屋の壁面の一部であったコンクリート面を露出させる。

壁面の状態は薪を取り除かない限り確認はできない。作業中に移動させた薪は三万本にも及んだ。アルミ箔(業者から提供されたもので厚み：0.001 ㎜）の貼り込み作業については、渡辺五大がイニシアチブを取り、薪小屋内のコンクリート面全面は水性シーラーで定着。

薪小屋の内部

薪の移動作業

薪を移動させた後に露出した壁に箔を貼り込む

②外部壁面における活動

外部壁面（約 60 m）周辺については、壁面周辺に集積していた膨大な杉の枝葉を取り除く事から作業が始まり、壁面を露出させる。次に露出した外部壁面の表面の埃や苔等をワイヤーブラシで除去。アルミ箔を貼り込むにあたって、壁表面の比較的大きなギャップを埋める必要性があった為、モルタルでコーティングを施す。理由は貼り込んだアルミ箔がギャップで浮いた部分から剥離することを防ぐためである。

次に外壁をコーティングしたモルタルの乾燥を待ち、乾燥後、薄いプラスチック板で表層のモルタルを掻き取る。ギャップに埋め込まれたモルタル以外はすべて取り除き、モルタルの塗布で埋もれてしまっていた既存の細かい壁面表層のディティールを再生。次にシーラーを塗布した後、外壁への定着に耐えられる溶剤でアルミ箔を壁面に定着していく。この作業は数カ月に渡って行われた為、風雨や獣（たぬき等）などの周辺環境に度々傷つけられ、その度に修復を余儀なくされた。作業が進むにつれて、壁面と箔が適度に安定して密着する術を体得し、前半の試行錯誤から流れるような作業に活動が変質していった。

ここまでの活動は協力スタッフの長谷川真弘氏と樂土舎の方々が進行を支えてくれた。

壁面周辺に堆積する杉の枝や葉

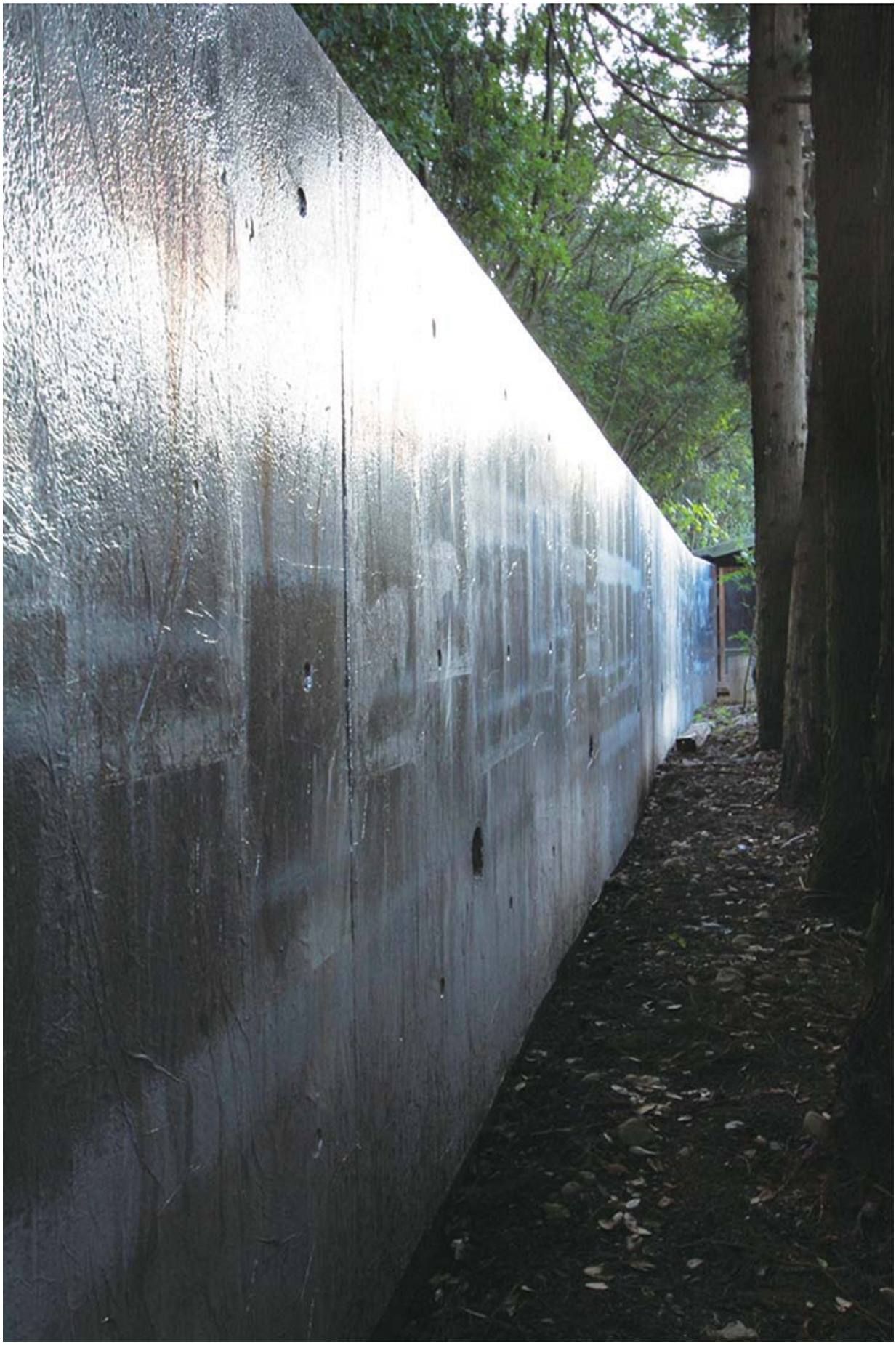
撤去作業

金ブラシで苔や埃を除去

モルタル塗布作業

シーラー塗布作業

箔の貼り込み作業

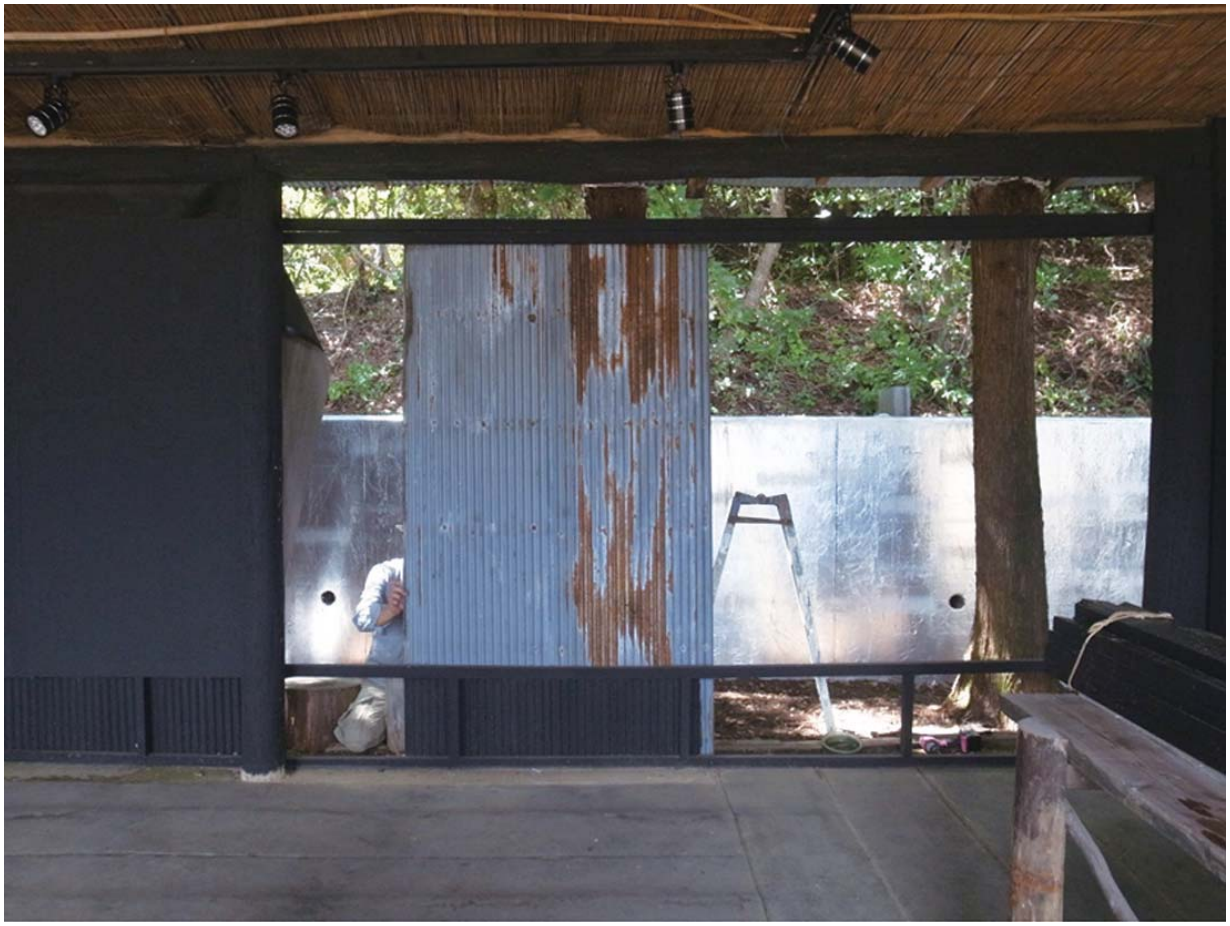


箔が貼り込まれた壁面

③風の家におけるスリット壁設置作業

我々の作品は、鑑賞者に対して二通りの見る態度が仕組まれている。一つは、鑑賞者が外部壁面に近づき、様々な視点を伴なって移動しながら認識する視点。次に風の家（敷地内に点在する建造物のひとつ）の中から眺める静止（或いは固定）した視点である。壁面を外から直にみる自由な視座と対照的に風の家の中から眺める視座は、鑑賞者が風の家内側壁面一部をスリット状に切り落とした開口部から外壁を眺める事で、作者によって厳格に規定された視点に誘導されて対象を認識することになる。

具体的には既存の壁面（風の家内側壁面一部：下図）を撤去した区画（3320 ㎝× 2180 ㎝）へ新たに、壁面を設置し、スリット状の開口部（3320 ㎝× 26 ㎝）を設ける。



既存の壁を撤去

壁の構造体を設置

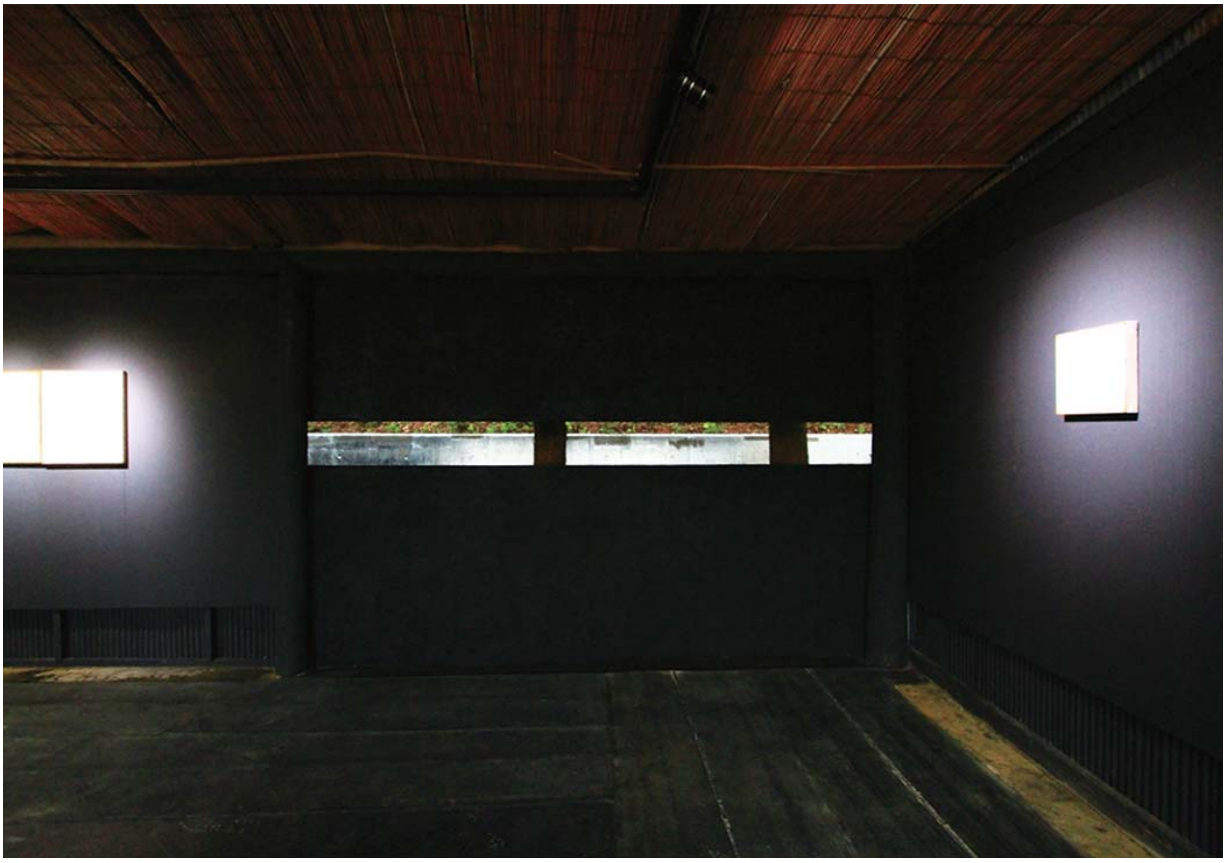
壁の構造体を設置

外壁側から見たスリット部分

スリットの外壁側はテーパーを切る

スリットは絶対水平を確保するため、水平器を多用し、慎重にエッジを決定していく

珪藻土を塗布した上に墨で塗装し、さらにランプブラックの顔料をフィクサチーフで定着させる



同空間には松浦延年氏の作品が設置される

松浦氏も我々のスリットの存在に呼応するように、作品の配置を決定

ジャスピアニストの山下洋輔氏によるセッション

まとめ

テーマ「ボーダー・ボーダレス」を基にこのプロジェクトは、およそ一年に渡る長期制作期間を費やすことになった。作家３名（長橋秀樹・渡辺五大・山本浩二）とボランティアスタッフで取り組んだこの活動は樂土の森の四季を通過しつつ、代表のマツダ氏への交渉（作品の具体的施行について）を重ねる。その交渉は、我々に様々な局面を指し示し、その都度我々の活動の意義や目的を氏に提示し説得することで、次の展開が保障された。

結果的には、当初我々が計画していた内容と必ずしも一致してはいない。そもそもこの場所は美術館やギャラリーではないのだ。このプロジェクトにおいては、作品が単独で展示されることを暗黙に受け入れる状況でない故に、必然的に制度（あるいは制約）と共に形作られることを容認する作家の態度が求められる。

風の家において松浦延年氏の平面作品と同空間で展示されることは、ある程度の作業段階で認識されていた為、スリット状の壁面の表層をコーティングする施策については、表層が主張しないマットな仕上がりを松浦氏との議論の中で選択した。

さらに会期中には、我々の生み出した場にピアノを持ちこみ、ジャスピアニストの山下洋輔氏が譜面代わりにこの空間を読み込みながら音に翻訳し、音と視覚芸術のセッションが成立した。